

野菜も後継者も育てて防災にも役立つ

地域で8基の ソーラーシェアリング

兵庫県宝塚市西谷地区

文：編集部 写真：大村嘉正



ソーラーシェアリングとは、

農地に支柱を立てて太陽光パネルの架台を設置。

頭上で発電しながら、下で作物を栽培する方法で、

農地を農地として利用することから「営農型発電」とも呼ばれる。

従来、農地法では田畑で発電・売電するには農地の転用許可が必要で

農振地域では困難だった。

しかし、2013年度末に農水省が「支柱部分のみの一時転用」を

認めたことで、優良農地にも太陽光パネルの設置が可能となり、

許可取得件数は13年度末の97件から4年で1269件に広がった。



市民農園に設置したソーラーシェアリング。遮光率は33%、強風に耐えられるように太陽光パネルを水平に設置



パワーコンディショナーで直流を交流に変換して電力会社の系統に連系。支柱には1.5kWの非常用電源のコンセントが付けてある



数年前まで70aの花弁専業農家だった古家義高さん。ソーラーシェアリングを2基所有しており、売電収入でバイクの新车を購入

市民農園でソーラーシェアリング

兵庫県宝塚市の市街地から北に車で30分、高層マンションや住宅が立ち並ぶ景色が一変し、盆地の中にのどかな田園が現われた。市のおよそ3分の2の面積を占める西谷地区は、昭和の合併で宝塚市に編入されるまではひとつの村で、現在2500人(市の人口の1%強)が暮らしている。

やがて道端の小さい田んぼの一角に「KOYOSHI農園」の看板を掲げたソーラーシェアリングが見えてきた。

「私の名前と『なかよしこよし』から命名したんよ。農地はワシので、施設は株式会社宝塚すみれ発電(後述)。売電しながら農地も活かす市民農園型ソーラーシェアリングや。市民農園なら、いろんな人に再生可能エネルギーや農

業に関心を持ってもらえる」というのは、農園のオーナー・古家義高さん(68歳)だ。

90㎡の農地に3mの高さで架台を組み、180枚の太陽光パネルを設置。台風などの影響を考慮してパネルの仰角はフラットにしてある。西谷地区は山が低く、高い建物もないので日当たりは最高にいい。出力は46・8kW(売電収入は年間約150万円)、一般家庭15〜16軒分の電気を賄える発電量だ。

市民農園は全部で300㎡あり、1区画(25㎡)の利用料は年間1万8000円だが、パネルの下の36区画は栽培品目をサツマイモに限定し、5000円と格安にしている。というのも、ソーラーシェアリングでは、農業委員会に対して毎年農作物の収穫量の報告が義務づけられており、「収穫量が近隣の8割に満たない場合」は指導や撤去の対象となるのだが、多品目の収量を、しかも市民農園の区画ごとに出すのは極めて難しいからだ。県の指導で作物を1品目に限定したのは苦肉の策だった。

「この課題を克服するため、市民農園に限っては収量の報告ではなく、利用率の報告にすべきと国に申し入れているところですよ。いずれはそうなってほしい」

ソーラーシェアリングの設置には、営農の継続が必須条件。年をとって畑仕事がしんどくなってきたら、市民農園のようなかたちで、農業に興味がある人たちに使ってもらえばいい。発電も農業の一部。小さい農家の新しい経営のカタチとして、どんどん仲間を増やしたいと古家さんは意